



現代中東・イスラームの諸問題を 考えなおすための五冊

松山洋平

- ① 後藤絵美 『神のためにまとうヴェール』 中央公論新社、二〇一四年
- ② 小杉泰 『現代イスラーム世界論』 名古屋大学出版会、二〇〇六年
- ③ 中田考 『カリフ制再興』 書肆心水、二〇一五年
- ④ 松山洋平 『イスラーム神学』 作品社、二〇一六年
- ⑤ 宮田律 『石油・武器・麻薬 中東紛争の正体』 講談社、二〇一五年

「イスラームについて知りたい」「中東の国に興味がある」という声があります。聞かれるようになった。ただ、そのなかには、「ムスリムはなぜ戦争ばかりしているのか、てっとりばやく教えてほしい」「とにかくハード（正戦）の意味を知りたい」と言う人も多い。

しかし、短絡的な説明を早急に要求するこうした問いの立て方——言いかえれば、ムスリムによって戦われる戦争の原因をイスラームの宗教的教説にのみ求めようとする考え方——は、他者を理解するための態度としては十分に礼儀をわきまえたものとは言えないだろう。いかなる物事を理解するときも、そのための予備知識が必要である。四則計算も知らないまま、微分・積分を学ぶことはできない。

イスラーム、ムスリム（イスラーム教徒）、中東、アラブ、テロリス

ム、ヴェール、ジハード……。こうした名詞は、ときに十把ひとからげに、ときに恣意的なかたちで都合よく切り取られ、不正確な理解にもとづき、イメージの先行するままに語られている。

イスラーム理解の必要性が叫ばれる今こそ、中東やイスラームをめぐる諸問題を根本から考えなおすために、腰を据えた読書が必要ではないだろうか。

ここでは、IS（イスラーム国）問題や、「テロ」の問題に話題をしばらずに、現代のイスラーム世界にかかわる諸問題を考えるうえで前提となる知識を提供してくれる本、あるいは、そうした問題を別の視点から捉え直すきっかけとなるような本を、五冊紹介することにした。

- ① 後藤絵美著 『神のためにまとうヴェール』 中央公論新社、二〇一四年

こんにちの欧米文化圏においては、ムスリムという他者との共生と対話が喫緊の社会的課題であることが認識されている。ムスリムによる「テロ」事件や、それにもなつて増加するムスリムにたいするヘイトクライム、そして排外主義の高まりは、ヨーロッパ各国で社会問題となつて

ムスリムによる「テロ」事件は日本においても逐一報道されており、二〇一五年のISによる米国人や邦人の殺害以降、中東情勢のみならず、その地域の支配的な宗教であるイスラームへの関心は高まりつつある。

ただし、注意が必要なのは、ムスリムとの共生の課題は、欧米諸国と、欧米諸国から遠く離れたいわゆる「ムスリム諸国」とのあいだで、外交という手段でのみ取り組まれるべきものではないという点である。二十一世紀現在、地球上の全ムスリムのうちの五分の一から四分の一前後は、ムスリムが多数派を占めるいわゆるイスラーム諸国ではなく、ヨーロッパやアメリカをふくむ非イスラーム諸国のなかでマイノリティとして暮らしている。「ムスリムとの共生」という課題のひとつの局面は、こうした非イスラーム諸国におけるイスラームのあり方、いいかえれば、マイノリティとして生きるムスリムが、イスラーム的な規範・価値とホスト社会のそれとをいかに整合させるのか、という問題をめぐるものである。

女性ムスリムが頭部に被るヴェールは、こうした文脈のなかで注目をあつめているテーマだ。フランスでは、公的な場所で女性ムスリムがヴェールを着用することを禁止する、通称「ブルカ（ヴェール）禁止法」が施行されている。「女性のヴェールは、女性抑圧の象徴である」との主張が、世俗主義・排外主義の陣営から声高に唱えられており、この主張を支持する市民は少なくない。いま「ヴェール問題」は、世俗と宗教、西洋とイスラーム、ヨーロッパにおける人種差別問題を考えるための格好の切り口のひとつと言える。

後藤絵美『神のためにまとうヴェール』（中央公論新社）は、このヴェールの問題が主題である。本書は、現代においてヴェールをまとうことを選択した中東の女性たちに焦点をあて、一般のムスリムの、ごく普通の日常のなかでの宗教心の変遷を、ていねいに綴っている。

彼女たちは、何をきっかけにヴェールをかぶるようになったのか？ 神をどのように意識し、近代化された社会のなかで自身の宗教心をどのように体現して生きようとしているのか？

本書は、大衆メディアの分析や、エジプトでの現地調査などを通して、さまざまな媒体に表現される女性たちの声を拾い上げるとともに、ヴェールにかかわるクルアーンの諸節の専門的解釈やイスラーム法規範の考察も適切におこなっている。類書と比較しても、読みやすさと内容的な深みにおいて際立っている。

政治的な問題ばかりが着目されるなかで、中東の一般市民の宗教実践はほとんど顧みられることがない。本書を通して、現代に生きるムスリムというアクターを、「テロリスト」としてではなく、ごく普通の日常を生きる隣人として捉えなおすことができるだろう。

② 小杉泰著『現代イスラーム世界論』名古屋大学出版会、二〇〇六年

「アルカイダとは何か？」「ISとは何か？」

イスラーム世界で新しい事件が起こる度に、局所的に重要なキーワードについて、門外漢でも瞬時に理解できる解説が求められがちである。しかし、各々の事件の背景には、何世紀にも渡る人々と国家の歴史と苦悩がある。

小杉泰『現代イスラーム世界論』（名古屋大学出版会）は、今日のイスラーム世界が形成された過程を、近現代にイスラーム世界が経験した政治的・社会的・経済的な変動を追いながら詳細に描ききる。イスラーム世界全体の構造的な変化をおさえながらも、それぞれの国・地域における特殊性にも焦点があてられている。

近現代に現われた思想家、思想潮流、政治的概念についても詳しく紹介され、イメージだけで語られることが多い、現在の中東情勢のなかで重要性を持つアクターの実体を理解することができる。

著者の小杉泰は、日本の中東・イスラーム研究を牽引する研究者である。本書『現代イスラーム世界論』は、その小杉の研究の集大成とも言える著作であり、それ故に大著である。しかし、文体は平易であり、門外漢や学生でも理解できるよう配慮されていて、非常に読みやすい。興味のある分野にかかわる箇所を拾い読みするだけでも、新たな見地が開

けるだろう。題名のとおり、現代イスラーム世界について考えるための決定版とも言える一冊である。

③中田考著『カリフ制再興』書肆心水、二〇一五年

IS（イスラーム国）がアブー・バクル・アル・バグダーディー氏を「カリフ」に据え、カリフ制の再興を主張したことは日本でも報道されている（カリフとは、イスラーム共同体の政治的元首を意味する。七世紀以降カリフ制は維持されてきたが、一九二四年にカリフ制が廃止され以降、カリフ空位の状態が続いていた）。

ISが再興を主張する「カリフ制」や、「残忍な」刑罰を含む「イスラーム法の施行」は、日本の報道機関では、「時代錯誤的」「彼ら独自の解釈」などと形容されている。

たしかに、彼らの主張・実践には、ある部分では、本来のイスラームの神学的・法学的議論とは異なる独自の解釈が含まれている。しかし、彼らの主張・実践がすべて無条件に「独自の解釈」であるとの判断は、いささか乱暴であろう。

イスラーム共同体の政治的な元首である「カリフ」の擁立を義務とする説は、スンナ派の全神学派・法学派の一致した見解であり、今日においてもイスラーム世界全土の宗教学校でそのように教えられている。

中田考『カリフ制再興』（書肆心水）は、この「カリフ制」を主題とし、カリフという概念にまつわる基本的な論点、その歴史、二十世紀にカリフ制が消滅した後にはムスリムが興した諸々のカリフ制復興運動、そして、そうした運動とIS版「カリフ制」との間の質的な相違について、神学的・法学的な専門的議論も組み込みながら、わかりやすく論じている。

本書が提起する視角によって、ISを、「カリフ不在の例外状態において、スンナ派のムスリムによって引き起こされたカリフ制再興を目指す革命運動のひとつ」として、もう一度捉えなおすことができるだろう。

そのような見方をすることは、なにもISの主張を擁護することを意

味しない。カリフ制の概念、およびその歴史についての知識は、むしろISを「正しく批判」するために不可欠な知識のひとつなのである。

④松山洋平著『イスラーム神学』作品社、二〇一六年

イスラーム最大の宗派であるスンナ派の神学界には、おおきく分けて二つの潮流が存在する。ひとつは、アシユアリー学派とマートウリーディー学派に代表される「思弁神学派」の潮流。もうひとつは、ハンバリー法学派によって担われる「ハディースの徒」の潮流である。

両陣営は基本的に対立関係にあるが、歴史的には、近代にいたるまで思弁神学派の陣営が教的・政治的な優位を保ってきたため、激しい闘争は生じなかった。しかし、近現代において、「ハディースの徒」に位置づけられる諸々のサラフィー主義（復古主義）の諸集団が台頭することで、両陣営の勢力は拮抗した状態に入った。しかも、現代のサラフィー主義の多数派は、思弁神学派に対してきわめて攻撃的な性格を有している。

したがって、エジプトのアズハル大学に代表されるような「体制派」の学者——彼らは「思弁神学派」の潮流に属する——にとつて、現代における喫緊の課題のひとつは、サラフィー主義の拡大を抑え込み、「ハディースの徒」に対する自分たちの優位を回復することにある。言い換えれば、ISに代表される武闘派・サラフィー主義勢力と、アズハルに代表される体制派の学者集団との間の抗争は、十一世紀にまでさかのぼることができる。思弁神学派と「ハディースの徒」の抗争の、壮大な延長戦として捉えることができるのである。

松山洋平『イスラーム神学』（作品社）は、イスラーム最大宗派であるスンナ派の基本的信条を詳しく解説する、本邦初となるイスラーム神学の本格的入門書である。スンナ派の正統／異端観や、スンナ派に内在する学派間・学者間の見解の相違にも論及している。イスラーム神学の最重要古典のひとつである「ナサフィーの信条」の全訳も収録されており、スンナ派のムスリムによって奉じられる神学的教説を直接的に知る

ことができる最良の邦書と言える。現代の政治的な問題を直接論じたものではないが、思弁神学派と「ハデイースの徒」の見解の相違にも言及しており、上述のような、現代イスラーム世界の情勢の神学的文脈を理解する上で、不可欠となる知識を提供する。

また同書は、スンナ派の「異端」観に一章を割き、本邦ではあまり知られていない、スンナ派によるシーア派観も論じている。これまでシーア派を解説する邦書は複数冊出版されてきたが、スンナ派とシーア派がたがいとどのように異端視しているのかという問題は、一般書のなかではほとんど説明されていない。湾岸諸国やイエメンにおいてスンナ派／シーア派間の政治的対立が深まる今日、スンナ派の異端観を知るためにも必携の一冊と言える。

本書を特色付ける要素に、巻末に収められた付録、「ムスリム・マイノリティのためのイスラーム法学と神学」の存在がある。この付録は、日本のような非イスラーム地域に生きるムスリムが直面する問題について、法学的・神学的な見地から論じたエッセイである。昨今、移民の受け入れが世界的な課題になっているが、イスラーム諸国と歴史的接点のなかった日本の中には、ムスリムの住民が増えることに対する不安の声もある。しかし、現代のムスリムからは、非ムスリム諸国のホスト社会との共存を促す法理論である「マイノリティ法学」なども提起され、共存のための思想的な努力もなされてきた。このエッセイでは、日本では紹介が遅れている、この「マイノリティ法学」についても紙幅が割かれており、相互理解を促すための素材となるだろう。

⑤宮田律著『石油・武器・麻薬 中東紛争の正体』講談社、二〇一五年

現代の中東諸国で発生している戦争を「イスラームの問題」としてのみ考察する見方には大きな問題がある。なぜなら、イデオロギーや宗教が戦争を発生させる主因であることはほとんどなく、現代においてそれはより顕著であるからだ。しかし、ISのような組織がからむと、たち

まちそうした事実が見えにくくなってしまふ。日本では、中東で行われている戦争を、宗教戦争・宗派間闘争であると思いついてる人も少なくない。

宮田律『石油・武器・麻薬 中東紛争の正体』（講談社）は、「米国を中心とする欧米諸国の軍産複合体」、「石油争奪戦」、「麻薬ネットワークの闇経済」など、特異な視点から中東の戦乱に光を当てること、戦争の発生には、イデオロギーだけではなく、複合的な問題が絡み合っているという単純な事実を思い出させてくれる。

著者の宮田律は、これまで「イスラーム過激派」に関する著作をいくつも著してきた、当分野の第一人者と言っても良い。しかし、今回の氏の著書は、著者の売りでもある「イスラーム過激派」の分析をあえて駆使せずに、中東の戦争を継続させる非イデオロギー的な要素を浮き彫りにしている。中東情勢のイデオロギー的な事情を知り尽くした著者だからこそ、戦争を生む非イデオロギー的な部分が何であるか、明確に説明することができたのであろう。

本書はまた、中東情勢のみならず、日本の大衆メディアでは触れられないグローバル化された現代社会全体の構造に目を向けるきっかけにもなるだろう。国際的な問題に関心のある大学生にもお勧めできる、時宜を得た良書である。